

デューク大学における博士課程の研究教育

G. ワイゼンフェルド

デューク大学美術・美術史・ヴィジュアルスタディーズ学科

デューク大学は、その前身であるトリニティ・カレッジが1838年にノース・カロライナ州に創設されたところに始まった。1892年に現在の同州ダーラム市に移転。そして、1924年に、この市の主要産業を担っていたタバコ会社の企業家ワシントン・デュークにちなんで、現在の名称、デューク大学と改名した。以来、全米あるいは世界でも屈指の私立の研究大学として知られている。ここでは、美術・美術史・ヴィジュアルスタディーズ学科を中心に、デューク大学の大学院教育の特徴について述べていきたい。

デューク大学全体の大学院教育の理念には、3つのことが掲げられている。第1に、当大学院は、未来の教師、研究者、専門家を育てながら、新たな学術的な知を発展させ、その世界への普及において中心的な役割を担うことをめざしている。第2に、大学院生には、学部生の助言者としての役割と教員の同僚とも呼べる役割を担いながら、研究と教育を接続させるパイプ役として活躍することが期待されている。そして、

第3に、研究大学の一つとしてデューク大学の教員と院生は国際的に高度な研究水準を追求することが求められている。

デューク大学の大学院は、少数の優秀な学生が学術的に評価の高い研究者と密接にかかわりながら研究を進めていくことを理想としている。大学院の学科は60を数えるが、院生の数は全体として2,200人程度であり、それに対し、教員の数は全体で約1000人である。大学院に入学した院生のうち約75パーセントが博士号を取得する。

大学院の授業は、すべて少人数制であり、教員は学生一人ひとりに気を配り、学生は1対1で指導を受ける。教員と院生はともに、学際的な研究姿勢が求められている。大学院のカリキュラムは、個々の院生の研究テーマ、関心、進捗状況に合わせて個別に組み立てられるようにできている。既存の学問の狭い枠組みや方法論を押し付けることはせず、最初から学際的・超領域的な指導体制をとっている。

院生には、常々次のことが求められている。まず、大学院教育は一種の見習い期間であるということが共通理解となっている。また、大学院生には、共同作業、個々の研究、執筆活動を通じて、「師匠」である教員と、同僚に等しい関係になるほどの立場を築くことが期待されている。さらに、院生には、創造力、大胆さ、新しい知見をもたらす意欲が要求されている。そして、伝統に挑戦しそれを革新することが最も重要なこととされている。

デューク大学はまた、地元の他大学との連携も重視している。中でも、ノース・カロライナ大学と（名古屋大学と交換留学生の協定を結んでいる）ノース・カロライナ州立大学とは、「研究トライアングル」と呼ばれる協力関係を築いてきた。学部生・院生は、制度的に提携大学の好きな科目の単位を取得できるようになっているし、教員・院生はこうした他大学のグループとさまざまな共同プロジェクトを立ち上げている。



デューク大学のシンボルとしてキャンパスにひと際高くそびえ立つデューク・チャペル

次に、美術・美術史・ヴィジュアルスタディーズ学科に焦点を絞って紹介していきたい。当学科は、美術・美術史学科として1931年に創設されたが、大学院プログラムが開設されたのは1994年である。現在の大学院プログラムは、博士号（Ph.D.）の取得をめざす学生のみを受け入れ、修士号（M.A.）は原則的に授与していない。教員スタッフは、11名の美術史研究者、3名のアーティスト、および4名の他学科所属の兼任教員からなる。プログラムは少人数制をベースに組み立てられているため、年に受け入れる学生数は5人程度である。

当学科の大学院プログラムは、美術、建築、視覚文化を歴史的かつ理論的に教育・研究していくことを目的としている。大学院生に対して私たちは、単に研究対象や史料の理解の方法のみでなく、より広い意味で社会に役立つための視覚文化・有形文化の解釈の技術を身につけるよう指導している。研究能力、教育の能力、そして批判能力のいずれにも優れた大学院生を求め、過去と現在の視覚文化に関する高度な研究に従事するための準備の手助けをする。とりわけ重視しているのは、デューク大学全体の理念とも通じることだが、人文学の分野で学際的・理論的に指導的な役割が果たせるようにサポートするということだ。美術史学科は、この点で独特の貢献をしている。当学科の教員は全員、他の学科・プログラムの教員とチームを組みながら、革新的な共同研究や教育プロジェクトに従事している。すべての教員が、古典学、経済学、文学、ドイツ語・ドイツ文学、宗教学、アフリカ・アフリカ系アメリカ研究、ドキュメンタリー研究、女性学、国際比較文化研究、中世・ルネサンス研究の教員とチーム・ティーチングを行ったり、あるいは相互に協力講座を担当したりしている。

アメリカでは、大学院へ進学する場合、学部とは異なる大学院に行くことが当たり前だと考えられている。デューク大学もその例にもれず、同大学の学部から大学院に進学する学生はあまりいない。その一方、全米もしくは世界中から優秀な学生を確保するため、教員スタッフは大学間や学会のネットワークを通じて紹介された優秀な学生に直接コンタクトをとることがある。また、デューク大学に興味のある優秀な学生には旅費を支給することで、大学訪問を促し、プログラムの利点の説明はもちろんのこと、在籍する院生とともにキャンパスを案内したりパーティを催したりする。

入学を許可された院生は全員に何らかの奨学金が与

えられる。奨学金は、通常、5年間の授業料と給付からなる（1人年間、計\$55,000＝約6百万円、うち授業料は\$36,050＝約4百万円）。ただし、受給者は全科目でA-以上の成績を取得しなければならず、もしこれ以下の成績であったり、2学期続けて必要な単位を取得しなかったりした場合は、支給が差し止めとなる（事実上の退学要請）。多くの奨学金は、ティーチング・アシスタント（TA）として働くことが条件として含まれている。TAの院生は、学部のディスションのクラスを受け持つのが普通で、ときとして初級レベルの講義も担当する。TAは、将来教員になるための訓練として位置づけられており、担当教員と密にかかわりながら授業を積極的に組み立てることが期待されている。TAがハンドアウトの印刷等の事務的なことを行うことはほとんどなく、そうしたことはむしろ教員の方が行いTAのために授業のお膳立てをしてあげることが少なくない。奨学金は、こうした基本的なものに加えて、学会や調査のための旅費などが審査の上で院生に支給される。

大学院に入学する際、院生は指導教員を1人決めることになる。初年度の最後には、博士論文審査委員の委員長を選ぶように求められる。そして、2年目の最後に、院生は、博士論文審査委員長および大学院プログラム・ディレクターと協議しながら、審査委員を选考する。博士号の取得は、大学院入学から5、6年で達成することが期待されている。カリキュラムは、主専攻・副専攻ともに、指導教員と大学院プログラム・ディレクターと相談しながら院生が個々にデザインする。院生には、15科目分（語学を除く）の履修が義務付けられている。（他大学で修士を修了した者については、博論審査委員長およびプログラム・ディレクターと相談の上、一部の科目の履修が免除される。）少なくとも2つのセミナーは、主専攻以外の科目を履修しなければならない。4つの科目は、当学科以外の学科で履修することになっている。院生は、博士論文執筆資格試験に合格し、その2年以内に論文を提出することが要求されている。2年以内に終わらない場合は、審査委員長とディレクターの承認を得た上で大学院研究科長に1年間の延長願いを申し出ることが可能だが、その1年をさらに越えると博論執筆資格の取り消しとなり、再度執筆資格試験を受けなければならない。また、すべての院生は2カ国以上の外国語を取得することが義務付けられている。語学力は、博論執筆資格試験の前に、学科独自の試験により審査される。

こうしたプログラムがめざしていることは、2つの

ことに集約できる。1つは、デューク大学全体の使命に則り、米国内外でその存在感を示し強めること。そして、もう1つは、急速に変化しますます多様化している国際社会において、将来、院生たちが確実に成功を収めていくことができるようにすることである。

最後に、学科の附属施設について紹介しておきたい。まず、視覚資料センターという施設がある。ここでは、アナログ、デジタル双方の画像を継続的に収集し、教員・院生の日々の授業や研究をサポートしている。美術や建築の作品の画像が、古代から現在に至るまで、西洋と非西洋を問わず集められている。その数は、現在、35ミリ・フィルム・スライド320,000点、写真40,000点、著作権取得済みのデジタル画像65,000点、その他のデジタル画像55,000点に上る。内容は、建築、線画、絵画、写真、版画、彫刻などの伝統的な芸術作品から、ガラス、宝石、象牙、金属、木などによる装飾芸術もしくは実用的芸術、そして、身体芸術、コンピュータ・アート、デジタル・アート、パフォーマンス・アート、ビデオなどのニュー・メディア、さらには社会的・文化的・歴史的史資料にいたるまで多岐にわたる。これらは、デジタル資料として、デューク関係者なら誰でも自由に利用できるようになっている（外部には非公開）。デューク大学にはまた、附属施設としてナシャー美術館（<http://www.nasher.duke.edu/>）がある。さらには、ドキュメンタリー・スタディーズ・センター（<http://cds.aas.duke.edu/>）や広告・マーケティングの資料館ジョン・W・ハートマン・センター（<http://library.duke.edu/specialcollections/hartman/index.html>）といったユニークな視覚文化関係のアーカイブがある。これらのセンターは、外部の研究者に調査のための旅費として助成金を支給することもある。興味のある方は、それぞれのウェブサイトを参照されたい。

また、近年私たちは、ヴィジュアル・スタディーズ・イニシアティブ（VSI）という斬新なプログラムを立ち上げた（<http://visualstudies.duke.edu/>）。これは、全学規模で、視覚研究を、自然科学、社会科学、人文の相互作用を促しながら行おうとするものである。具体的には、人文の諸領域のほか、数学、工学、医学のイメージング、地図作成、デザイン、情報科学、論理学、グラフィック・デザインなどが関係している。芸術的、大衆的、商業的なあらゆる形式の画像の生成、流通、記号性、再生、イメージング・システムがその研究対象となる。知の生産にコンピュータ処理



デューク大学附属ナシャー美術館の外観



デューク大学附属ナシャー美術館の内観

とデジタル効果が深くかかわるようになった今日のデジタル時代の要請に、理論的・実践的に応えようとするものである。VSIによる授業科目では次のようなテーマが教えられている。(1)古代から現代までのヴィジュアル・リテラシー、(2)古代から現在までの視覚化の技術の歴史（古代の「星取り法」、16世紀のカメラ・オブスクーラ、写真、テレビ、前衛映画とビデオ、ヴァーチャル・リアリティ、インターネット、サイバースペース）、(3)ミクロ・イメージングおよびマクロ・イメージング（熱画像測定、X-Ray、大電波望遠鏡、ハッブル望遠鏡）から感染症の視覚化にわたる科学的視覚化の問題、(4)ローマ時代の遠近法やビザンチンのドレス・コードから現代のファッション、広告、政治漫画、産業デザインに至るまでの大衆的な文化的産物や実践、(5)視覚表現、経験、文化におけるパフォーマンス的な身体、(6)人種、性、ジェンダー、階級、トラウマの視覚化、(7)眼差の理論、監獄から衛星その他の観察形態におよぶ監視の理論などの、ヴィジョンと視覚の歴史・理論がその例である。また、VSIでは毎年、世界中から著名な研究者を招聘している。例えば、2008年には、シカゴ大学のW. J. T. ミッチェル教授とドイツ・カールスルーエの芸術メディア・センターのベルント・リンターマン教授を客員研究員としてお迎えしている。

以上、デューク大学の大学院プログラムの特徴、とりわけ美術・美術史・ヴィジュアルスタディーズ学科



文学研究科大会議室にて

の特色を簡単に述べてきた。この報告が、名古屋大学大学院文学研究科の大学院教育に少しでも役立ち、今後さらに交流を深めることができれば幸いである。



ワークショップ及び引き続き行われたセミナーのポスター

(付記)

本文は、2008年5月17日に、英語を使用言語として開催されたワークショップでの話、パワー・ポイントによる提示資料・情報、質疑応答、およびワークショップのために準備されたアウトライン（不配布）をもとに、藤木秀朗が翻訳・再構成したものである。